

『釋摩訶衍論』における「四種法熏習」の一考察

関 悠 倫

一、はじめに

「四種法熏習」とは、『大乘起信論』（以下『起信論』）中「解積分」において説示される熏習論であり、四種の熏習のあり方、一「淨法」、二「一切染因」、三「妄心」、四「妄境界」の四種に「真如」、「無明」、「業相」、「六塵」がそれぞれ対応すると説かれている。¹⁾

その内、淨法が一、染法が三と配当され、衆生が心の作用によりどのような相続を経て変化し、染と淨が生起していくかを論説している。

熏習といえば、衆生の日常の身口による言動が記憶する媒体（阿頼耶識）に作用し、それがさらに深化し、より熏習されていくとされる。しかし、『起信論』の場合、淨と染が互いに熏習の作用をすると説く。つまり真如が無明に熏習を施し、無明もまた真如に対し、そうした過程をする。それらの過程を経て導き出される衆生の心における淨染相続のあり方を説いているのである。

小論では、『釋摩訶衍論』（以下『釋論』）自体が『起信論』由来に沿った解釈であるか、そうではないかとの検討と、どのような経緯から「熏習」解釈に「五重問答」が展開され、どう「三大熏習」と関わるかについて、論前後にわたった関連性の考察が必要であると考えている。そのため本研究の内容は、終始解説面に片寄った性格となることを了承願いたい。

また、本論『起信論』と注釈書『釋論』の原点引用について、『釋論』の理解を中心に考察するため『起信論』本文は『釋論』上から引用し、本論とある場合は『起信論』を指し、以外については適時、名を明記する。

二、『釋論』における「四種法熏習」解釈

それでは、『釋論』における「熏習」解釈について検討する。まず本論では、「熏習」について以下のように説く。

「世間の衣服には実には香無きも、若し人、香を以つて熏習するが故に、則ち香氣有るが如く、此も亦是の如し。」²⁾とし、香の香りの喩えを用いて「熏習」を説明する。

まず『釋論』は本論の内容に対し、五門を設定し解釈を行う。³⁾すなわち、「總標綱要門」・「立名略示門」・「通釋熏習門」・「分割散說門」・「盡不盡別門」の五つであり、それぞれの文に論説を配当する。

第一門「總標綱要門」とは、本論、

「復次有²四種法熏習義²故。染法淨法起不²斷絶²故。」

に対し、六つ意があると説く。以下に六つの解釈をまとめてみる。

一、「相待相成似有意」・染淨諸法は染と淨の熏習により成立する。だがそれは仮のもの。

二、「本無性空非有意」・染淨諸法等の名は世間における仮の名前。

三、「相待相成顯空意」・染淨諸法は因と果の相待により仮に現れたもので、自性空。

四、「自然虛空無礙意」・染淨諸法は有非有ではなく無障無碍自在。

五、「非作非造自然意」・染淨諸法は有佛無佛により相熏相生して相続し斷絶しない。

六、「不守自性無任意」・染淨諸法は因縁により生滅するため、本来染と淨も決定的なものではない。

六種の内、一番目に注目したい。そこには、染淨諸法を染すなわち「無明」と、淨すなわち「真如」により生起することを最初に表明している。本論注釈書としての『釋

論』の立場を暗に示していることになる。

二番以降では、染淨二種を仮のものであるとの『釋論』独自の論説を展開する。一方で、『釋論』が「真如」、「無明」、「業相」、「六塵」を、染淨の二種に、統合して捉えていることも大きな特徴と言えよう。

六番目は、染と淨の二種の性について、因縁や非・非有等の喩えを用いて説明し、六意の最後には、染淨諸法の性質を無性の義とする説示をするため、「作縁起陀羅尼」と「縁起陀羅尼」を説いている。

この門の構造を考えると、「四修法熏習」理解について六つにまとめた、と同時に、以下に解釈される論説はそういった論証の性格を有している。つまり、第一門における『釋論』の立場は、大まかな思想構造の表明になる。

第二の門「立名略示門」を見てみると、『釋論』は以上の門より二門を立てる。前者に「真如」、後者に「無明」・「業識」・「妄境界」の三種を配当する。

「真如」とは「自性清淨本覺藏智」、「無明」等の三種は「離體相本上無明」であると説く。前述同様、「真如」以外を一括にする。

また、本論の論説では、「真如」を「生滅門」側より眺めた論説であると推察されるのに対し、『釋論』では「自性清淨」や「本覺」の文言の説示にとどめており、詳しく説かれていない。

「離體相本上無明」と説くことから、體相を離脱する本上の無明であり、體は「真如」・相は「本覺」を離脱する「根本無明」と「枝末無明」と推察される。

第三門「通釋熏習門」では、二門を立てる。第一の「比量譬喻善巧門」は、独自の熏習の例えを本論の譬喩に準え、「芬香」・「鄙香」の好悪の香二種を用いて、林に入る時、種々の香を焚き染めるといふ説示を展開する。これは、『起信論』の論説を意識したものであると言えよう。

第二の「法喻合説安立門」は「一向明白」・「一向闇黒」の二種を立てる。

「一向明白」は「真如」についての説示であり、第二門で論説した「自性清淨本覺藏智」との関連性からも、「真如」の性質を再説している。

一方、「一向闇黒」については、「無明」を「一向闇黒」として捉え、「無明」そのものに「智明」や「白品」といったものが無く、闇黒に対し本覺をもって働きかけること(熏習)を「淨用」と説く。この二種の性質について、『釋論』は第一門のように、「實自性無」とし、染も淨も幻化したもの、つまり本質的に無であるとする立場をとる。

第四門「分割散説門」については、他の門に比べ分量が大部で、多種多様な門を立てる。

こうした論説は、ここに限らず解釈に先だつて力説したい箇所のため量が多岐にわたっており、熏習論以外にも「立義分」解釈等も同様に、『釋論』全体に共通する特徴と言えよう。

まず、展開される門について、①「黒品相熏有力門」より②「總問總答顯宗門」・③「歸總作別散説門」を立てる。二番目に④「白品相熏有力門」より⑤「總問總答顯宗門」・⑥「歸總作別散説門」を立て、三番目に⑦「發起問答決疑門」を立てる。第四目に⑧「舉緣廣説開通門」より⑨「總標軌則決定門」・⑩「縁相散示生解門」の計四門、その中の三門より、計六門を立てる。(記号筆者)

②「總問總答顯宗門」は、「生子と能生父」の譬喩をあげる。業識が生起し動き始めると、それが「無明」そのものに熏習し増長した惑を起すと説く。「安心」の働きについては、生死の苦海を逃れ、涅槃の岸に到達することができないと説く。

以上に締めくくりとして、本論「以有境界染法緣故。即熏習三安心令下其念著造三種業。受中於一切身心等苦故。」を引き、安心という境界の風が、無明という現識海を波立たせ七識の波浪となり、そのことが諸悪の業を生じさせ一切の苦惱を報いとして受け、三界を「循環」し、四毒の「賊浪」を起すと説く。

③「歸總作別散説門」は、門より「境界」・「安心」・「無明」の三種、それより各々二種の思想が含まれるとし、計六種があると説く。

「境界」に「如實熏習」と「如有熏習」二種、これらを「境界熏習」とし、「安心」に「上熏」と「下熏」二種、これらを「安心熏習」とする。「無明」に「有成就意」・「空成就意」の二種、以上の六種を説く。

「境界」について、本論「增長念熏習」に対し「如實熏習」。「增長取熏習」に対し「如有熏習」が対応する。

前は「法執の念を増す」、後は「人執の着を長ず」を表現していると推察される。(傍線筆者)

「安心」とは、「業識根本熏習」を「上熏」、「增長分別事識熏習」を「下熏」に対応させる。前は「三乘聖人」が「阿羅漢辟支佛一切菩薩」を指し、「上熏」となり、後は「一切凡夫」を指し「下熏」となる。

「無明」における解釈では、中間の無明(末那)の理解に『熏習經』を引用し、有

空の二種によつて中間も説明できるとする立場を説く。

⑤「總問總答顯宗門」については、前述と同じく総問として位置づけ、以下に「無始自然熏」・「始有建立熏」の二種、それらに「本因果」と「始因果」を配当する。

「本因果」とは、三賢十聖位にして三身四徳の果を有し、「十種本覺眞智」およびその「十種如實法界」において根本無明である「十種枝末無明」を熏習すると説く。

「始因果」とは、十信位以前の凡夫がその位に到達する力（熏習）、すなわち涅槃を求めめる心である「眞如性」の「熏習」により赴く發展段階を説く。

⑥「歸總作別散說門」とは、「妄染熏習門」・「淨法熏習門」の二門の内、前者の門から「麁」・「細」、後者の門からは「總標門」・「開釋門」を立て、さらに「開釋門」より「法身自然熏習門」と「應化常恒熏習門」を設定する。

「麁」とは「意識麁熏習」のことで、「四十心凡夫」および「緒二乘」の衆生を対象とする。「細」は「十一未那識熏習」。「初地」から「金剛」の衆生を対象とすると説く。

「法身自然熏習門」・「應化常恒熏習門」については、三大の熏習についてここでは説いている。この三大熏習については、別項にて検討することとする。

⑦「發起問答決疑門」については、以下に「有覺門」・「無覺門」の二門を展開する。この門の特徴は、先の門、「淨法熏習門」中の説示について問答形式を採用した難問である。

衆生が発心し修行をするあり方について、『釋論』自身が問題と意識し設定した門と考えられ、または、「四種法熏習」全体の論難であると言えよう。

この門の冒頭で『釋論』は、これより以下に説示される説示は理解が難しく、一問一答のように明瞭にはいかなないことを表明している。¹²⁾

筆者は、この箇所で説示される「有覺門」の「五重問答」や、「無覺門」の「問答」の内容が、「五重問答」のそれより前に説かれる「三大熏習」と密接に関連し、その論説が何らかの意図があるように考える。これについて後に考察したい。

では「有覺門」と「無覺門」について考察する。そもそも大本の問題としてはこうだ。「一切衆生悉有本覺」について「本覺」があるのかないのかを提起し、その難について展開される。

まず、前者について、具体的な本論所説の引用をあげていない。ここでの特徴は、「本覺」があると説くことにある。

「本覺」とは諸衆生にあり、衆生それぞれに別々の覺があるのではなく、「本覺」そ

のものである。「體」が諸衆生に遍じていると捉えている。衆生には多種多様な相があり十人十色、差別の性が生じるとして「意趣別故」と説くのである。

その差異について、『大空地玄文本論』を引き、衆生差別の性を、差別の性と見た場合それは無明である。だが、無明自体に差別の性があるのではないと説く。

そして一無明とする立場を「自宗決定」として『大空地玄文本論』、多無明とする立場を「引攝決定」として『起信論』とする。つまり『釋論』は前者を眞實の立場、後者を仮法的立場として表して会通している。

このような論説を行う背景について、『釋論』は、如来が「懈怠痴」の世間衆生を対治したいと思うがゆえに、「有」無量無邊無明「能覆」佛性」と説いたとする。そのため、無明が同一であるという問題よりも、衆生の側にたつて相続する無明のあり方に重きが置かれ説かれたとするのである。

では佛性については、「成佛」を論点として、なぜ成佛自体に順序差異があるのかについて、『大空地玄文本論』を引く。

そして衆生には「勤行」・「不行」・「聰明」・「闇鈍」等の違いや無量の差別がある。本来同一なる「本覺」・「佛性」を持ち合わせており、一時に発心し修行すれば無上道にいたれるが、煩惱厚薄のため佛性にも強弱があると説く。これより以下に「五重問答」が展開される。

次に「無覺門」についてである。この門は「有覺門」の「本覺」を認める立場とは逆の論説をする。「一切衆生無有本覺」を提起し、その理由として「無所依本覺」と説く。¹³⁾

発心修行することにより無上道に達すると説くことに対し、眞如の熏習があるのなら、一切衆生の「有信」・「無信」・「有修行」・「無修行」の差別が生ずるのは疑問が起さるため、皆が一時に熏習の自覺をもち修行すれば平等に涅槃にいたるのではと難を投げかけるのである。

それに答える形で、衆生が眞如に熏習されているとする自覺は、本来一つである眞如の功德も無始以来の「無明」による厚薄が原因で、それに不同が生じ、先に成佛するもの、後から成佛するものが現れるのであると説いている。

⑧「舉緣廣說開通門」は、他の門より複雑に展開され、整理が難しい。

先の門より、⑨「總標軌則決定門」と⑩「緣相散示生解門」の二門、前門より「法體說」・「譬喩說」・「契合說」の三説、「契合說」より「總說」・「別說」の二説。「別說」より「緣闕單因無力門」・「因闕單緣無力門」・「因緣具足圓成門」の三門が説かれる。

また、後門より、「總説」・「別説」の二説、「總説」より「能縁」・「所縁」の二種。「別説」より「有簡擇縁」・「無簡擇縁」の二種、「無簡擇縁」より「總説門」・「別説門」の二門が展開される。門だけでも煩わしい。

まず⑨「總標軌則決定門」中「法體説」・「譬喩説」・「契合説」の三説について考察する。「法體説」については、本論、「又諸佛法有因有縁因縁具足乃得成辦¹⁵」に対応する。

『釋論』はこれについて、「因」を「本覺性種」、「縁」を「權實別用」として佛法の成立をみる。

「譬喩説」とは、本論に四種の譬喩、「木」を「染法」・「火」を「智慧」・「人」を「衆生」・「燒」を「對治」、と説く。

「契合説」とは、二種の説「總説」・「別説」が展開され、前者は本論の「衆生亦爾」に対応する。これは『釋論』の最も大きな特徴の一つとされる、「總」に対する特別な理解である。ここでは、衆生所為の事業の総説として「總」と説かれる。

後者の「別説」は、「縁闕單因無力門」・「因闕單縁無力門」・「因縁具足圓成門」の三門が説かれる。

上は、「真如」の熏習があっても修行の縁を断てば佛を得ることができないとする。中は修行の縁があっても、「真如」の熏習がなければ涅槃を得ることができないとする。下は上と中の「真如」の熏習と修行の縁が具足したことにより涅槃を得ることができると説く。

この上・中・下の三門は、真如の熏習という内因と、修行へと赴こうとする外縁の關係性を三位一体として説いている。

⑩「縁相散示生解門」とは、「總説」より説示される「能縁」・「所縁」の二種の内、前者について考察する。ここでの特徴は、『釋論』が「用熏習」を能縁と所縁に分け解釈していることにある。

本論では「用熏習者故¹⁷」に対応する。『釋論』は、「應化身」と捉える。衆生のために開示された「法身」の体性を教化する能縁として現れたのが「應化身」であると説くのである。

後者は、本論の「即是衆生外縁之力故¹⁸」に対応する。これは「應化身」が能縁とするに對し衆生は所縁の立場にあたと捉える。つまり「應化身」が衆生に教化を働きかけると説く。

「別説」における「有簡擇縁」については、「應化身」が衆生に働きかける能縁に差別の側面について説く。本来差別のないものであるが、衆生の立場から眺めるとき、所縁の側から差別の論説が説かれるとする。

「無簡擇縁」中「總説門」・「別説門」の二門は、多くの論説が展開されるが、その中で、自然に修行することにより「真如三昧力」に依って一切の法性の境地を観ることができ、平等であると説いている。

最後に第五門「盡不盡別門」については、この箇所は本論でいうところの「染淨熏習」最後の段である。

『釋論』は、一切の「妄法」は「無始有終」とし、「淨法」は「有始無終」であるとする。これ準えて「盡不盡」としている。「真妄」は極めて相違し「俱行」しないものと説き、双方が正反対の性質であると規定する。

ここでの考察をまとめると、『釋論』が本論に對する随分解釈を試みている点と、「真如」、「無明」、「業相」、「六塵」の四種を「真如」と「無明」の二種に二元化しようとする傾向があると言えよう。また、「無明」を悪しき根源として捉える視点は、「無明」そのものの働きも論説する反面、衆生の側にたつて相續するあり方についても重きが置かれ説かれていと推察できる。特に、双方の理解について熱弁を振る、第四門「分割散説門」は、『釋論』の思い入れを感じさせる。尚、「四種法熏習」解釈を図にしたものが資料①である。

三、三大熏習について

三大熏習とは「自体相熏習」と「用熏習」をいう。この三大の主な働きは「真如熏習」の立場を「自体相」と「用」の二面より論説する。

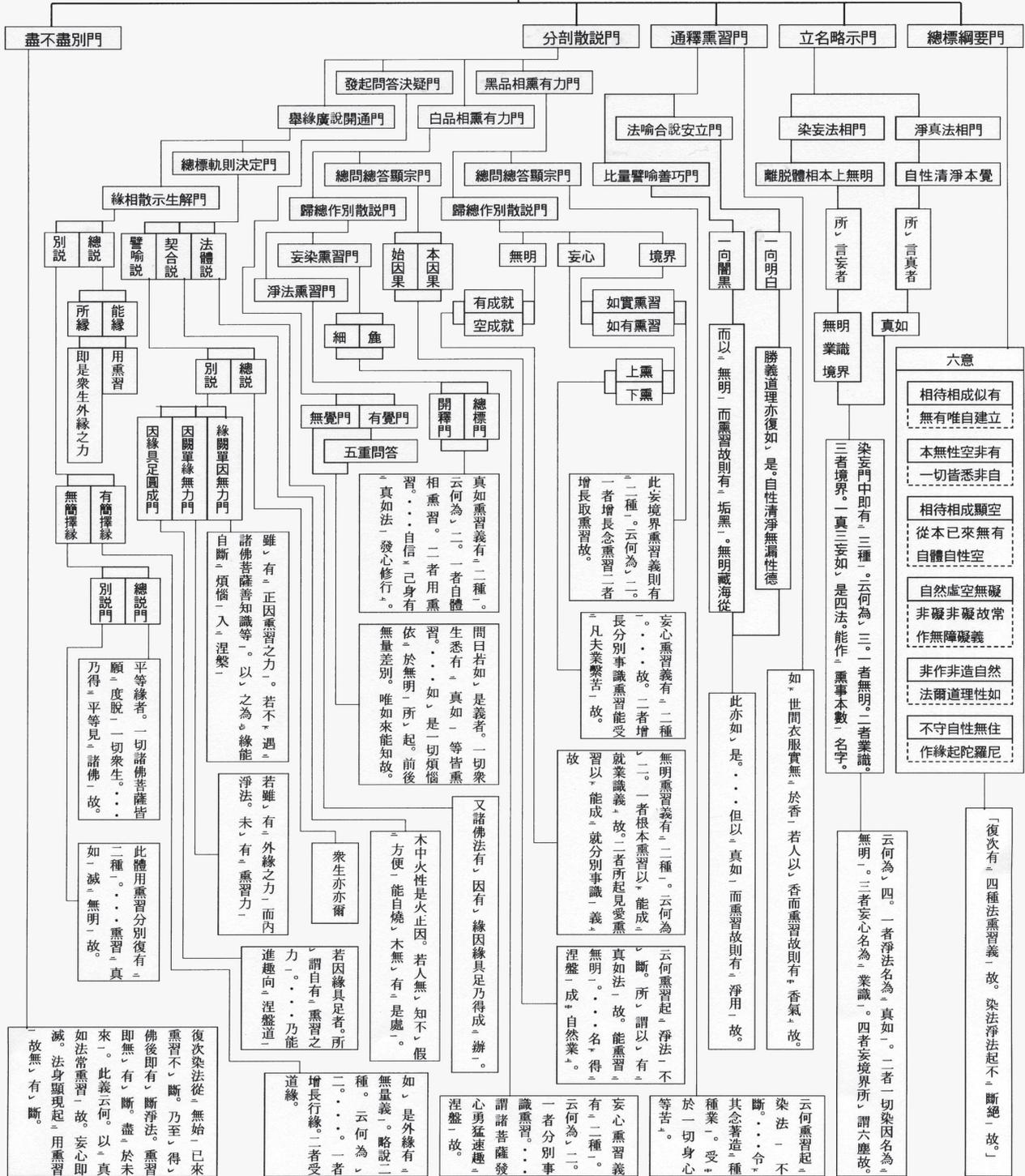
「三大」と聞けば、「体相用」をいうが、ここでの三大には「自」があり、「体」と「相」が一括りされ、「用」が独立して説かれている。なぜこのような説示がなされたのかをここでは検討し、「真如」の性質にまで迫っていきたい。

『釋論』における本論引用によれば、「自体相熏習」と「用熏習」について、「自体相熏習者。從無始世來具無漏法」。用熏習者。備有不思議業作境界之性¹⁹。」と説く。

前者は、「真如」・「本覺」を「無漏法」と捉え、それが無始世より備わっていると、

『大乘起信論』「四種法熏習」

『釋摩訶衍論』



『釋摩訶衍論』における「四種法熏習」の一考察

後者は、「不思議業」という真如の働きを備えた「境界之性」と説く。

これについて、『起信論』原文を見てみると先のように説かれていない。すなわち、

「自體相熏習者。從_二無始世_一來具_二無漏法_一。備有_二不思議業_一。作_二境界之性_一。依_二此二義_一恒常熏習。以_レ有_レ力故能令_下衆生厭_二生死苦_一樂_二求涅槃_一。自信_二己身_一有_二真如法_一發心修行_上。」

とあり、『釋論』上で解釈される「用熏習」の箇所は「自體相熏習」の説示に該当しているのである。

要するに『釋論』の意図的な改編であり、作者が二者の立場を不離として捉えていることに由来する。

『釋論』は、「自體相熏習」理解に「法身自然熏習門」を設定し、「無漏法」を「本覺性智」と説いて、功德圓滿して智慧を具足すると説いている。

「用熏習」には、「応化常恒熏習門」を立て、「本覺」が「彼恒沙」の「無量無邊不思議」な「業用」を発し、一切衆生の心相に対して、応に随つて教化する。それにより一切の悪を断じて一切の善を発すと説く。

では、本来「用熏習」が説かれる本論の箇所と解釈を見てみたい。ここでは「応化身」の裏付として、

「即應化身。能為_二衆生_一造_二作成本覺之境界_一故。」⁽²⁾
と説かれる。

この論説は、「縁相散生解門」中「總説」より説示される「能縁・所縁」二種の内、「能縁」の説示において解釈される箇所である。先の『釋論』の論文は、著しく改編した文に類似する。

それはつまり、「三身」の働きの再説、と前述の「三身」が不離であることを説明する必要があつたことが根底にあるといえる。

さらに踏み込めば「真如熏習」において展開される「五重問答」との関係が起因している。

なぜそのような体裁となつたかを考えると、本論の解釈と、『釋論』独自の論説展開の並行が難しいと判断したためと考える。

「自體相熏習者」と「用熏習」について『釋論』⁽²⁾は、前者を「法身」、後者を「応化身」と捉える。そのため「応化身」が解釈される二種の門について、「如_レ是二門不相捨離。」と説かれ、二種が別に分けられるものではないとし、締めくくりに「三

身本有理故顯了」と、「三身」が「三大」と深い関係であることを説示しているからである。

一方で、なぜ「自」が付されているかについては、『釋論』は「自作自無他力故。」と説く。「自作」とは、その内一つが自然作の「体」、二つが自然作の「相」を表し、「自」が付されるのだと説いている。⁽²⁾

この理解についてこれらと関連するであろう、「立義分」解釈上の「自」の論説をみてみると、

「何故依_二真如門_一所趣入_レ之摩訶衍法唯立_二體名_一。依_二生滅門_一所趣入_レ之摩訶衍法立_二自名_一耶。真如門中無_レ他相_一故。生滅門中有_レ他相_一故。他謂一切不善品法。自謂一切清淨品法。」

と説いており、「真如門」中に「他相」無く、「生滅門」中には「他相」があると説く。「他」とは「一切不善品法」、「自」とは「一切清淨品法」であると説いている。さらに、

「若所對治他無。能對治自無故。唯言_レ體不_レ說_レ自焉。若所對治他有。能對治自有。故名言_レ自不_レ唯體_一焉。復次為_レ欲_下顯示_中一法界體平等無_レ有_二其私_一。無量性德自然本有非_レ得_二他力_一故。」

とあり、対治する「他」がある時、「自」はあり、対治する「他」が無い時、「自」は無いと説く。そのため、「真如門」所説には「自」は無く「生滅門」所説には「自」があるのである。

「三大熏習」の場合、対象に「真如」の功德を働きかけることが目的であるため、「無明」が「他」として見るならば、「三大熏習」は「自」となる。すなわち、当初問題としていた「真如」が「真如門」か「生滅門」由来であるかは、後者の繋がり指摘できる。

だが、「真如」そのものの本質が「生滅門」ではなく、「熏習論」の立場から眺めた場合であり、「真如門」上の「真如」に関係していることを踏まえることも重要な視点である。

結局のところ、以上の検討の根幹をなすのは、第一門「總標綱要門」において、「六意」の「染淨諸法」理解を仮のものであるとする説示が、「四種法熏習」理解で衆生の迷い（無明）をいかに取り除くかということに重きをおいた論であると言えよう。

四、「真如熏習」解釈に展開される

「五重問答」との関係性について

次に「五重問答」との関係性について考察する。この箇所は、「發起問答決疑門」中「有覺門」にて説かれる。

一般的に「五重問答」と言われているが、『釋論』上ではそのような名は説かれていない。問答が五つの段階をもって構成されているに由来する。この問答は、弘法大師空海（七七四〜八三五）による著作撰述の際、引用されたことによりその知名度が後世において注目されたといっても過言ではない。今回、筆者は空海の思想から離れて、この問答を考察したい。

まず簡単に「五重問答」について触れる。

① 十地を超え、無上地にいたり、三身を圓滿し、四徳を具足する一切の行者は？

無明

② 絶絶離離の清浄本覺は？ 無明

③ 一法界心は？ 無明^(註)

④ 三自一心摩訶衍（自体自相自用摩訶衍）は？ 無明

⑤ 不二摩訶衍法は？ 明か無明か？

と説いている。

筆者は五つの問答において特に「一切行者」という語について注目する。この理解に関連して「發起問答決疑門」が説かれる冒頭、

「此決疑門義理難^レ解文教更開。作^レ釋非^レ散說^レ無^レ定通人^レ不^レ能^レ明了。是故今更作^レ種種釋^レ。具足開示曉^レ行者心^レ。」

とある。

『釋論』は、これから以降に説かれる説示は、理解が難しく容易に伝わらない、さらにこれを解釈し説く。これにより「行者」の「心」を「曉（さとす）」と説いている。

「五重問答」の内容は、順に「三身」を圓滿した「行者」・「本覺」・「一心」・「生滅門」所説「三自一心摩訶衍」・「不二摩訶衍法」となる。その問答、説示冒頭に「心」を「曉（さとす）」とあるのには、行者と衆生の関係性と、問答最後の「不二摩訶衍法」を説示する体裁に深い関連を指摘できる。

まず、「行者」における「三身」の説示は、「三大熏習」が成立しなければならた

ないし、それは、「問答」以前に既に論説されていることが挙げられおり、その対象は一切衆生である。

次に、「清浄本覺」も、衆生に皆等しく「本覺」があると説かれており、「法身自然熏習門」中に説かれている。ここでの衆生が対象となる。

三番の「一法界心」と四番の「三自一心摩訶衍」は「立義分」解釈上で説かれており、本論所説「一心」・「二門」・「三大」の構造を「三十三法門」の中に、組み込んでいく。そして衆生について「衆」と「生」に分け、論説している。

この五種の構造は、法身・応身・化身とする「三身」や「本覺」、「不二摩訶衍法」を頂点とする「三十三法門」中の「一法界心」と「三自一心摩訶衍法」の二側面を問答に組み入れることで、「不二摩訶衍法」の絶対的価値の強調が『釋論』の目的と推察されるのである。

なによりも「三身」よりも価値が上であることを暗に示していると考えられ、『釋論』が改編した「用熏習」理解がこの問答の構想に起因している。

一方で今まで対象を衆生と説く立場を「行者」に変換する視点は、『釋論』の法門における修行の捉えかたが行者であるという独特の思想の表れと言えよう。

五番目の「不二摩訶衍法」が明か無明であるかについては、前述のごとく『釋論』の「不二摩訶衍法」を絶対視する本意が反映されていると推察する。

それがどのようなものではあるかは、当てはまる言葉とすれば、「法体」であり三大熏習の背後にある根幹をなす「法身」、さらには本論の「一心」・「二門」・「三大」を平等に合体させたそのものであると考えられるのである。

また、「不二摩訶衍法」自体記述される箇所は「立義分」・「迴向頌」解釈上、そして小論で取り扱う「四種法熏習」解釈のみであり、この限られた枠にある「不二摩訶衍法」の思想理解は困難であるが重要な点であると考ええる。

五、まとめ

ここまで知り得たことをまとめとする。以下に六点あげる。

① 『釋論』は一部を除いて本論に対し随文解釈を展開している。「四種法熏習」においては、五門を立て論説する。第一門での六種の意は『釋論』の「熏習」に対する根本理解であると言えよう。

②四種のあり方については、さまざまな論説が展開される。特に「真如」に対し「無明」が前面に押し出されており、他の二種（業識・六塵）については「無明」に包含される傾向が強い。まず「真如」を「自性清浄本覺藏智」、「無明」・「業識」・「妄境界」を「染妄」として括り「離脱體相本上無明」と説く。

別な説示には、「真如」を「障碍」と「無障碍」の中にある「虚空界」であるとし、「無明」と「業識」の関係を「生子と能生父」の譬喩をあげる。

その関係は、妄心という境界の風が、無明という現識海を波立たせ七識の波浪となり、そのことが諸悪の業を生じさせ一切の苦悩を報いとして受け、三界を「循環」し四毒の「賊浪」を起すと説いているのである。

③「四種法熏習」にかぎらず、『釋論』は独自の門を立て解釈する。特に、第四門が異様に多岐にわたっている。そして『釋論』が「縁」とりわけ「修行」を中心とした衆生と佛の關係性に注目している。

④「三大熏習」について、「三身」が「三大熏習」に関連する論を展開させるとともに、「三天」が別々に解釈し論説するには解釈上問題があるとする理解にいたった。

⑤「三大熏習」の「自」について、「立義分」上の内容から検討を試み、「真如門」由来ではないことを確認した。そのことから「真如」の立場は、本論の体系をもとに「生滅門」の側面より展開されたものであると言えよう。

⑥「五重問答」が展開された要因を、「三大熏習」の展開、そして「行者」の「心」が関係しているとする推考から、「問答」の順や、内容考察をした。

その結果、「三大熏習」所説の「三身」や「一心」よりも「不二摩訶衍法」が頂点であるとする『釋論』の意図を確認した。また、「衆生」を「行者」と置き換えており、『釋論』が「衆生」の立場にたつた、「無明」の多様な捉え方を展開していた。

なによりも、「五重問答」を「四種法熏習」中に論説するために（「不二摩訶衍法」説示）、「三天」や「三身」までの特殊な解釈がなされたとの結論にいたった。

今回は、論題の内容整理に大半が裂かれ、深く内容を掘り下げることができなかつた。今後は、『釋論』内部を検討し、見識を深めたい。

註

- (1) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三三頁中
- (2) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三三頁中

- (3) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三四頁中
- (4) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三四頁下
- (5) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三四頁下
- (6) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三四頁下
- (7) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三四頁下
- (8) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三五頁上
- (9) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三五頁中
- (10) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三五頁中
- (11) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三五頁中—下
- (12) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三六頁下
- (13) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三六頁下
- (14) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三七頁下
- (15) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三八頁上
- (16) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三八頁中
- (17) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三八頁下
- (18) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三八頁下
- (19) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三六頁中
- (20) 『大乘起信論』・大正蔵三三卷 五七八頁中
- (21) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三八頁下
- (22) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六三六頁中
- (23) 本多隆仁「体相用と自体相用——釈論を中心として——」（『智山学報』第五一輯所収二〇〇二年）、本多隆仁「不二摩訶衍法と如義言説」（『智山学報』第五六輯所収二〇〇七年）、藤田隆乗「『釋摩訶衍論』の一考察——体相用を中心として——」（『大正大学大学院研究論集』第九号所収 一九八五年）に詳しい。
- (24) 『釋摩訶衍論』・大正蔵三三卷 六〇一頁中
- (25) 「一法界心」の理解について既に先行研究が提出されている。那須盛隆「弘法大師の自証三昧」（『智山学報』第二二輯所収 一九七三年）、本多隆仁「釈摩訶衍論における立義分解と五重問答」（『佛教思想史論集』所収 一九八四年）には「一体一心摩訶衍」と述べられている。また、中村本然「釈摩訶衍論」に説かれる熏習論の特徴について（『高野山大学論叢』第三三卷所収 一九八八年）には、

前述二種を踏まえた上で、「有覚門」・「無覚門」等のことも含めて一考を要する問題であると述べており、一方で同著『釈摩訶衍論』の五重問答について「『智山学報』第五六輯所収（二〇〇七年）には、日本・中国に跨る詳しい研究報告が提出されている。

(26) 本多隆仁「不二摩訶衍法と如義言説」(『智山学報』第五六輯所収 二〇〇七年)に、「不二摩訶衍法」の有り方について委しく述べられている。筆者もこの説を理解の手立てとする。